

月報

<446号>

ケルン・ボン日本語
キリスト教会
二〇一九年九月三〇日発行

「ヨルダン川を渡る」

佐々木 良子

今年の夏は思いもよらない猛暑に見舞われましたが季節は移り変わり、今となっては暑さも懐かしい夏の思い出となりました。今年も残りの二ヶ月となり、この一年を振り返ってみますと、瞬く間に時が過ぎ去ったと同時に、今年の私は決断の年であったように思います。

ドイツで暮らすということは、私にとって未知の世界の中に飛び込んで来たようなものでした。しかし、その道は更に続いていることを知ることになりました。新年早々に手術を受けましたが、そこに至るまでには、大きな選択、決断が必要でした。それは、手術をドイツか日本で受けるかということでした。最終的な決断は祈りの内に、全てを主に信頼し、また教会の皆さまの助けを頂いてドイツで受けるという答えでした。

主に信頼して一歩踏み込んだと同時に、様々な問題がひとつひとつ解決され、道が開かれてゆく喜びを教会の方々や、日本で祈ってくださったいた方々と味わうことができました。これから進むべき道をあれこれ想像し、考えてそこに立ち尽くしている限り、状況は何も変わりません。むしろ、神との関係は希薄になるばかりです。

信仰とは、聖書をしっかりと学び、聖書に記されていることを調べるような机上の学びではなく、神を信頼し具体的に一歩踏み込むという行動を伴った決断です。そうして、既に神によって開かれている道があることを発見し、神の恵みと慈しみがそこにある

ことを知るようになるのです。そこに踏み込まないで、主に出会うことはできません。考えてみますと、誰もがみなこの世で生かされている限り、天国に帰るまで大なり小なり決断の連続だと言えます。迫ってくる試みの中に諦めて巻き込まれてゆくのではなく、全幅の信頼をおき、そこに希望を見出すのが信仰者といえます。

聖書の至る所から、主に信頼して歩む信仰者の模範の姿が描かれていて、大きな示唆が与えられます。過去の出来事として読むのではなく、現在の私に語られている神の言葉とした時に、大きな勇氣と力が湧いてくるものです。更にこの私にもどのような道を主は備えていてくださるのだろうか、決断が希望へと繋がっていきます。

ヨシユア記には、エジプトから導き出され、四〇年間放浪の旅をしたイスラエルの民が、いよいよ終わりにさしかかる、クライマックスの場面が記されています。主はヨシユアに命令されました。「……今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。」(ヨシユア記一章二節)

目指してきた約束の地は、すぐ目の前に見えていました。しかし、その時期は春の刈り入れ時で、ヨルダン川はレバノン山の雪が解け水かさが増し、渡ろうとしても現実はとても不可能な状況でした(三章一五節)。にも拘わらず主は、「全地の主である主の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、川上から流れてくる水がせき止められ、ヨルダン川の水は、壁のように立つてあろう。」(一三節)と、仰せになりました。主は、祭司たちの足がヨルダン川に入ると、出エジプトの時に目の前の紅海が分かれたように、川の水は堰き止められて、約束の地に入ることができるといって約束してくださりました。

再度、ヨシユア記一章二節を見ますと、「……立ってヨルダン川を渡り……」主はヨシユアに「立つて」と仰せになつています。川の中を「泳げ」とは仰いせんでした。初めから主は、ヨルダン川の水を堰き止め、ヨシユア並びにイスラエルの民全員が堰き止められた川を、歩いて渡らせる計画だったのです。

主のご計画が実行されるためには、ヨシユアたちの決断が必要でした。主ご自身は、その約束を果たすためには、信仰者の決断がなければ、実行することではできないのです。主のご計画と私たちの決断によって、そこから新しい道が開けてゆきます。私たちが信仰の決断をして一歩踏み出す時、未知の世界、主の祝福の世界へと広がってゆくことを主は示しておられます。

このように主はいつも私たちと共におられ、私たちが主に信頼して全てをお委ねして、新しく一歩踏み出すことを待っておられます。私たちが頑張る努力して修行することを待っておられるのではありません。唯、飛び込むだけです。幼な子が高い所からジャンプして親の懐に思いっきり飛び込むように、私たちも主に信頼して、何の疑いもなく主の懐に飛び込んでゆくのです。

「さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。」

この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」

(ヘブライ人への手紙四章一四〜一六節)

私たちはこれから先、幾度、ヨルダン川を渡るような決断が迫られるのでしょうか。しかし、イエス・キリストに結ばれている者として大胆に主の懐に飛び込める幸いに感謝いたします。

(フランクフルト日本語福音キリスト教会礼拝にて)

ケルンで考えたこと

神戸聖愛教会 小栗 献 師



今年の夏はハシで行われた国際賛美歌学会に出席することになり、この機会に帰国以来一三年ぶりにケルンを訪ねることができました。ケルンの空気を吸い、懐かしい町を歩くうちにさ

さまざまなことが思い出されてきました。わたしにとってケルンにいた五年間は、牧師としても人間としても、再出発の時であったとわたしは思っています。ケルン・ボン教会のみなさんと一緒に聞いた聖書のみことば、一緒に祝った礼拝、一緒に歌った賛美歌、みなさんと一緒に飲んだビールとワイン。楽しいグリン。キリスト者の集い。その一方でつくづく思い知らされた、自分の力のなさや弱さや情けなさ。そんな思いを抱えながらも皆さんに支えられ、助けられてなんとか五年間を過ごしたことです。そのようなことのひとつひとつがわたしにとってのかけがえのない財産となりました。ケルン滞在中、ずっとそのことを考えていました。

今回のお世話になった皆さんとの再会、はじめてお目にかかった方々との新しい出会い、そしてボン・ハッファー教会での礼拝をみなさんと一緒に守ることができたこと、そしてデックシュタイナーミューン

でのケルン・シュール・楽しく充実した日々を過ごさせていただきました。息子さんの結婚式のお手伝いをさせていただいたマイヤーご夫妻が礼拝においてになつていられることもうれしいユーバーラッシュ・グングでした。ドイツ滞在中、わたしはとにかくやみくもに歩き回りました。日本に帰国してからマラソンなどを始めまして、今回の旅行靴にランニングシューズを入れていったということもあるのですが、後からスマートフォンで調べたら、九日ほどのドイツ滞在中の歩行(走行)距離は二〇〇kmを越えていました。朝に走ったシュタットヴァルトは、ケルンに在る頃によく走ったり歩いたりした森でした。

久しぶりのドイツの印象は、ドイツには歴史と文化と森と時間とビールとサッカーはあるけど、ほかにはたいしたものはないんじゃないかなあ、ということでした。でも、よくよく考えてみると、人が生きる上で本当に大切なものって、それらの他にいったい何があるのでしょうか。ドイツから日本に帰国して以来、怒濤のような、しかし貧しく無価値な情報に翻弄されて、落ちつきなく慌ただしく「大切ではないもの」に振り回されるばかりの毎日だったのかも知れない、ということも思っていました。ドイツにいる数日間、自分の体内時計が少しゆっくりに進むようになったように感じました。そして、少しだけ深く呼吸ができたようにも思いました。電話がかかかってこないということも、近年にあつては希有なことだったかも知れません。しかしながら、帰国すれば日本のリズムに戻ってしまつたにそれほど時間はかかりません。まだ一ヶ月あまりなのに自分がドイツにいたのが現実なのか夢だったのかもあいまいになってきます。それでも、今回の訪問もわたしにとっての新しい出発のき

っかけとなるんじゃないかと思っています。

滞在中、ケルンにいた頃にはまだなかったエーレンフェルトのモスクを訪れました。美しい建物だと思えました。今のケルンは、わたしがいた頃よりも外国から来た人たちが増えていると感じました。とくにケルンの町はいろんな意味で難民問題の最前線でもあると思います。帰国してから、たまたま難民の受け入れをテーマとしたドイツのドキュメンタリー映画も観ました。ドイツの国には、いろんな考え、主張の人がいるにしても、それでも外国人と共に生きようとしてきた長い歴史があることを感じていました。日本でも外国人が増えています。政治家も国民も多文化社会の中で共に生きていくというのがどういふことなのか、とれだけわかっているのか。そのための理念と覚悟をどれだけもっているのかということが問われていることを思わされます。

ケルン・ボン教会では、このところ教会の働きを中心的になってこられた方々が帰国されたり転居されたりして教会として厳しい時代を迎えているというお話を伺いました。ドイツの教会そのものもまた、厳しい状況にあると思います。その点においては日本の教会も同じような状況にあります。日本の多くの教会が存続の危機の中にあります。先日、東日本大震災の被災地でもある東北沿岸部の教会を訪ねて共に礼拝を守りましたが、多くの教会が、数名の教会員が宣教の困難な町で教会を守り続けています。そのような中でわたしたちができることは、とにかく連帯し支え合い励ましあつたことだと思わされています。

ケルン・ボン日本語キリスト教会もまた、遠く離れている日本にある教会と互いに覚えあい、祈りあ

い、支え合って、共に信仰の歩みが続けていくことができるようにお祈りしております。ケルン・ボン教会と佐々木先生、教会員お一人お一人の歩みの上に、ドイツで、そして海外で生活しておられるすべての皆さんの上に、神様の豊かな祝福とお守りをお祈りしております。

第三六回「ヨーロッパキリスト者の集い」に参加して

日本基督教団 世界宣教幹事 加藤誠 牧師

世界宣教幹事になって一〇年。毎年夏になるとどこからか聞かされていた「ヨーロッパキリスト者の集い」にやっと参加出来た。ホテルの会場に入っ
て真っ先に感じたのは種々雑多な気配であった。想像以上に（私も含めて）日本からの参加者が多い。リユニオンを喜び雰囲気は、それはそれで良いのであるが余り言葉に期待する高揚感を感じない。聞けば再来年の候補地が決まっていない。休会もあり得るとの事。つまり「ヨーロッパキリスト者の集い」が曲がり角に来ていることの原因を探りながらの参加となった。

牧師をしていると存外他の牧師の説教を聞く機会は少ない。その意味では欧州各地で宣教されている牧師たちの説教には期待した。みなそれぞれに課題と苦勞を抱えていることが滲み出た説教であった。自前の会堂を持たず、様々な背景を持ち、しかも出入りの多い海外の日本人教会を形成するのは一筋縄ではない。その中で開催地のルーマニアで宣教している川井先生ご夫妻は、明らかに異彩を放っておられた。共産主義政権の崩壊直後に日本人として初めてルーマニアに入られたことに驚きを禁じ得な

い。つまり宣教の対象が初めからルーマニア人であったという事である。その情熱に触れることができたのは大きな収穫であった。

その事には後ほど触れるとして、私は仕事柄海外を旅することが多い。基本的に気を付けるのはたっ



ぷりの水分、睡眠、食事とトイレの確保である。「集い」に参加する一月ほど前に私は英国メソジスト教会の年会（総会）に出席する機会に恵まれた。会場はバーミンガムのヒルトンホテルであった。時差ボケを解消するために昼寝をしたのだが、会議が連続でありしかもロンドン教区の議員として四〇〇人の参加者の真ん中に席が与えられていて脱出も不可能であった。しかもメソジストの方々は親切で、少しでも目を閉じようものなら起こしてくださる。実につらい！睡眠の調節が出来ないのは体調不良に繋がるので注意が必要である。

その点「集い」は木曜から始まり金曜と土曜の午後は自由時間であった。その自由時間にも市内観光等のプログラムが用意されていたのであるが、私はひたすらベッドで睡眠の回復に努めることができた。

実はシュミット・亜弥子姉から糖尿病の私のためにどう糖のタブレットをプレゼントされた。（ご自分の薬はお忘れになったのに）私は一度もなったことはないが、低血糖予防のために財布にどう糖は忍ばせている。取り出してみると消費期限は二〇一四年であったので、頂いたタブレットが役に立ったのである。「集い」が終わった日曜日の午後、私たちはバスで四時間ほど移動したバイアマーの「勝利」教会に到着し三時間！の夕拝と一時間の歓迎夕食会に参加した。バスを降りたところで川井宣教教師から夕拝での「挨拶」を頼まれた。そして講壇の上での挨拶直前に「二〇分」との時間指定を受けた。これは「メッセージしろ」への変更と勝手に受け止めて、時計を見ながらメッセージを取り次がせていただいた。実は海外でたまに経験することである。

ホテルに着くと夜の二〇時過ぎ。翌朝は八時過ぎ出発というスケジュールであった。最初の目的地で一人具合が悪くなった。同行の夫人から低血糖の言葉を聞く。有効なのはコーラやジュースであるがな。しかし亜弥子さんからいただいたタブレットがある！お渡しして一安心。恐らくはバスの移動中トイレで迷惑をかけることを恐れて水分を控えたために脱水と低血糖を引き起こしていたと推察される。

タクシーを呼び無事ホテルに帰っていただいたが、昼食場所でもう一方が具合が悪くなった。食事をもどしてしまつと体からカリウムとナトリウムが失われて歩行出来なくなる持病をお持ちであった。ところが佐々木先生が今年の手術の経験からカリウムを補う薬を余分にお持ちであった。これ以上詳しくは述べられませんが、世界宣教委員会として

は返しても返しきれない「恩」「愛」を今回ケルン・ボン日本語教会のお二人から受けました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。そして川井宣教師の情熱的な配慮で無事帰国が許されました。

今回の「集い」「ツアー」では共産主義政権下での迫害の証を聴くことができたのは恵みであり励みでした。一か所だけ残っている「迫害記念館」を訪れたのがツアーのクライマックスでした。ドイツでもかつて教会が迫害されたように、そして日本でも江戸時代を中心に歴史に類を見ないほど迫害された歴史をそれぞれの国が持っています。そしてそれに打ち勝つ力が教会には与えられていることを学べたのが最大の収穫でした。

◇ 報 告 ◇

◇七月七日(日)、ボンヘッファー教会との合同礼拝後、Strassenfest(教会通りのお祭り)に参加し、日本食コーナーを出店しました。日本からのお客様もお手伝い頂き、よいお交わりができました。

◇七月二十五日(二八日)、ルーマニア クルージュ・ナボカにて行われた第三六回ヨーロッパ・キリスト者のつどいに、佐々木良子牧師とシュミット亜弥子役員が参加しました。尚、日本より日本基督教団・世界宣教師委員の加藤誠幹事、朴憲都委員も参加されました。

◇八月二十五日(日)、佐々木牧師はフランクフルト日本語福音キリスト教会にて説教のご用をいたしました。

◇九月八日の礼拝後、熊本発の純愛ドキュメンタリー映画「もっこす元気な愛」を上映いたしました。子どもたちの礼拝においてになっている方々も参加しました。

◇九月二十九日(日)ボンヘッファー教会との合同礼拝後、聖書の食事を共にいたしました。

◇九月二十九日(日)外国語教会合同夕礼拝がAntonia Kircheにて行われ、私たちの教会は有志で賛美のご奉仕をしました。

◇ 予 告 ◇

バザーのお知らせ
 11月1日(金・祝日)
 13時~16時
 場所: ボンヘッファー教会

今年も日本食と喫茶、蚤の市が皆さんのご来場をお待ちしています! 収益は、ディアコニー「世界にパンを」へ献金いたします。

ボランティアを募集!
 ①商品の値付け、②会場の設営や撤収、③日本食、ケーキなどの提供(材料費は当方で負担します)、④当日の販売補助、⑤その他

詳しくは牧師まで

二月一日(日) 創立四二周年記念礼拝
 子ども祝福式

二月八日(月) ~ 二日(木)
 欧州教職者研修会 南ドイツ

二月二日(月) ママの子育ての学び会

クリスマス会 牧師宅・二時

クリスマスページェント礼拝&祝会

日時 二月二十五日(日) 一四時

※礼拝後祝会



昨年に続き子どもと大人一同でイエスさまのご降誕劇をします。どうぞお楽しみに!

※祝会に参加される方で、可能な方は五ユーロ位の交換プレゼントを準備して頂けると幸いです。

《礼拝》

主日礼拝 毎週日曜日・一四時
 大人と子どもの合同賛美礼拝 第四日曜日・一四時
 子どもの礼拝 第一日曜日・一二時半

《定例集會》

聖書を学ぶ会 第一・第三水曜日・一〇時 牧師宅
 読書会 第四金曜日・一〇時 牧師宅
 ケルン集會 第二木曜日・一一時
 メーアブッシュ集會 第二・土曜日・一四時三〇分 シュミット亜弥子姉宅
 ミュールハイム集會 隔月 第四・土曜日 藤井隼人兄・弘子姉宅
 ママの子育ての学び会 一四時三〇分 外間久美子姉宅
 第一月曜日・一三時 牧師宅

◇ 編集後記 ◇

最近目にした記事です。日本人の一人に八人は心配性で、世界で最も心配性な人種だそうです。災害の多さ、気候、横並びの文化、村社会など様々な要因が関連しているのではないかとことです。真実かどうかは分かりませんが、次々と襲ってくる台風や大雨での被害のニュースを見聞きしていると、納得せざるを得ない感がありました。被害に遭われた方々の上に主のお慰めがありますようにお祈りいたします。
 (佐々木良子牧師)

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.

〈主日共同礼拝〉
 会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
 住所: An der Decksteiner Mühle 1
 50935 Köln (Lindenthal), Germany
 電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
 時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00
 〈牧師〉 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)
 牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
 固定電話: 02234-9298792
 携帯電話: 0151-2910 6278
 Email: r310130s@yahoo.co.jp

〈ホームページ〉
<http://koelnbonn.jp>

〈振込口座〉
 IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
 BIC: PBNKDEFF